

# 春 告 草

第 91 号 平成 30 年 1 月 24 日 進路指導部発行

## センター試験を振り返る（第 1 回）

現行制度上、日期的には最も早い実施となったセンター試験が終わり、先週 17 日には中間集計が大学入試センターより発表された。現行課程になり 4 年目、新テストまであと 2 回となった今年のセンター試験だった。平均点や得点分布状況などをみながら、6 年生には個別試験への出願に向けて、5 年生、4 年生には次年度以降のセンター受験に向けての資料を提供してみたい。

### 主要科目では 14 科目の平均点がアップ

入試センターから発表された中間集計のデータ数は約 26 万人で、全受験者の 4 割強程度にあたる。右表に地歴 A 科目や英語以外の外国語などを除く主要科目の平均点と本校生徒の平均点を掲載したが、これを見ても分かるように、20 科目中 14 科目で平均点が上がった。全体の概要は 2 月 1 日に発表されるが、例年大きな相違はない。

教科別の状況を見ていこう。

(平均点の評価はセンター発表の中間集計に基づく。分布グラフは自己採点データ約 46 万件に基づいて作成されたもので、河合塾提供のものである。太線→今年、細線→昨年)

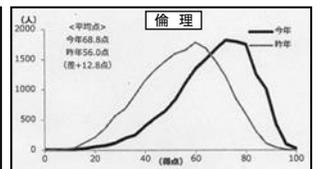
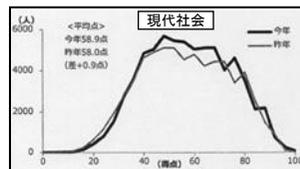
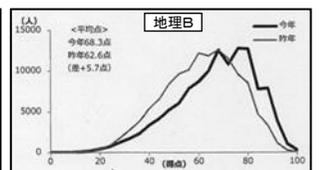
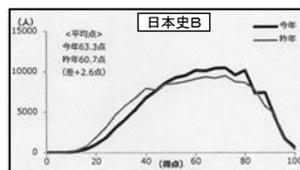
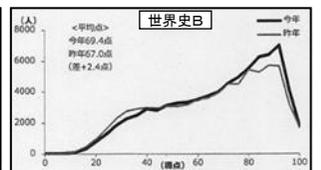
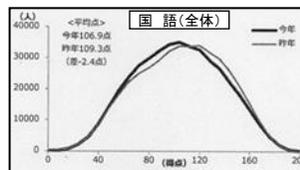
**国語** 昨年度は 20 点以上（100 点満点換算で 11 点、以下同じ）のダウンがあり「国語ショック」の影響を受けた受験生が多くいた。今年もダウンの見込みであるが、4.6 点（2.3 点）程度で緩やかである。分布状況は上位層が若干の減という状況である。

**地理歴史** 主要 3 科目いずれも上昇し、このうち 2 科目が 7 割を超える高い平均点となった。分布状況を見ると、世界史 B は特に 90 点を越えた辺りにピークがあり、高得点をとるのがノルマ。

**公民** 3 科目で上昇したが、政治・経済は 5.35 点もダウンした。昨年との差が大きかったのが倫理で、13 点近くも平均点が上がった。現代社会は倫理、政治経済の問題から構成されているが、得点分布は広範囲である。公民科目の中で最も受験者が多く、学力層も広がる傾向があるのだろう。

**数学** I A は昨年 5.8 点アップし、今年も 2.5 点アップの 63.6 点。平均点は上がったが、8 割以上の得点者は減り、中位層が厚くなった分布になった。II B も +4.2 点 → +1.9 点と連続アップの 53.9 点。

教科グループ	科目	配点	平均点		平均点 (昨年度)
			本校	全国	
国語	国語	200		102.36	106.96
地理歴史	世界史 B	100		70.18	65.44
	日本史 B	100		63.92	59.29
	地理 B	100		70.22	62.34
公民	現代社会	100	非 公 開	60.38	57.41
	倫理	100		67.52	54.66
	政治・経済	100		57.66	63.01
	倫理、政経	100		73.06	66.63
数学 ①	数学 I 数学 A	100		63.62	61.12
数学 ②	数学 II 数学 B	100		53.96	52.07
理科 ①	物理基礎	50		32.58	29.69
	化学基礎	50		31.23	28.59
	生物基礎	50		36.31	39.47
	地学基礎	50		34.94	32.50
理科 ②	物理	100	63.19	62.88	
	化学	100	62.06	51.94	
	生物	100	62.38	68.97	
	地学	100	49.87	53.77	
外国語	英語	200		125.50	123.72
	リスニング	50		23.05	28.11



3年前の平均点39点の「反省」が生かされているようだ。分布は7割以上の得点者が大幅に減り、中位層が厚い正規分布の形状に近づいた。

**理科** 基礎科目の理科①と専門科目の理科②ともに生物を除き平均点はアップした。理科①は50点満点でどの科目も平均点は30点を超えた。生物基礎は昨年が40点近い平均点だったので、さすがに今年は下がったが、それでも36.3点である。理科基礎科目は主に文系生徒の受験科目なので、この位の難易度が続くとは難しい。選択者数は生物基礎が最多で化学基礎がこれに続く。グラフを見ても分かるように両科目の分布状況は全く異なり、化学基礎は分布が広範囲に及ぶ傾向が強い。文系受験生にとっては化学基礎の攻略が鍵となるだろう。

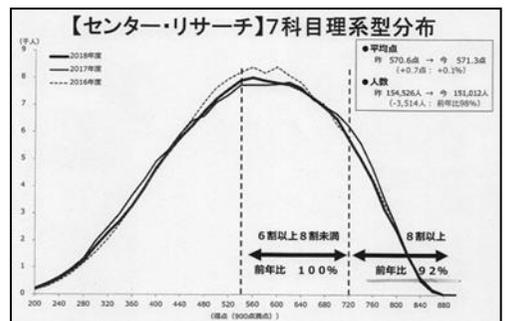
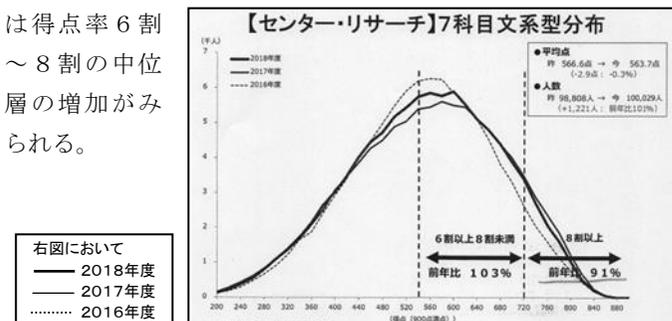
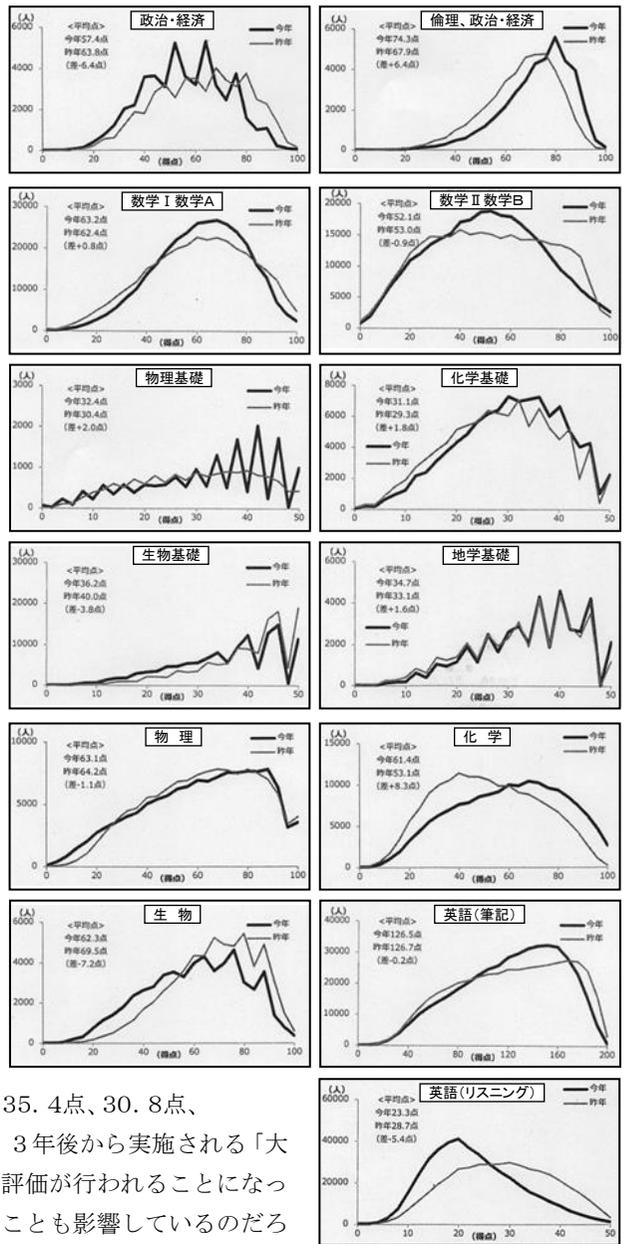
理科②は化学が10点以上アップし、62.0点。地学を除く3科目の平均点は62～3点で、今年は科目による点差がほぼ解消された。物理の分布は90点近くにピークがあり、理工系志望の受験生は高得点が望まれる。

**英語** 英語筆記は昨年より1.78点アップの125.5点（200点満点、100点換算で62.75点）だが、分布グラフは8割強のところまで昨年度グラフと交差し、上位層が減って中位層が増加した。分布のピークは7割から8割にかけてのところにあり、難関大挑戦にはセンターで9割はマークしておきたいところだろう。

英語リスニングは5.06点ダウンし23.05点（50点満点）となった。27年度試験からの平均点推移は、35.4点、30.8点、28.1点、23.05点となっていて、過去最低となった。3年後から実施される「大学入学共通テスト」では外部検定試験で英語の4技能評価が行われることになっていて、入学者に求める英語水準が高まってきていることも影響しているのだろうか。分布のピークは4割前後のところにあり、「難しかった」の声は多かった。5年生、4年生は、より一層リスニング試験対策を講じなければいけない。

地歴、公民、理科②のいずれも、科目間の平均点差が20点未満に収まったので、得点調整は実施されない。

最後に7科目の分布状況を掲載しておく。「文高理低」が継続し、データリサーチにおける国公立大文系志望者は昨年比101%、国公立大理系は98%であるが、文系理系とも得点率8割以上の上位層が減少した。文系は得点率6割～8割の中位層の増加がみられる。



# 大学入試ガイド(3)

## Road to University

3回目は5年生、4年生に向けて国公立大受験のシステムについて解説します。国公立大入試は、センター試験の成績と大学ごとに行う「個別試験」の成績を総合評価して行われる。出願受付も月曜日から始まった。29年度入試では国公立合わせて47万786人の志願があった。本校生徒も多く受験する国公立大受験について学習しよう。

### 国公立大学入学のルートは3つ

何といっても一般試験が基本だが、AO入試や推薦入試も難関国立大で行われるようになった。東京大学の推薦入試、京都大学の特色入試は3年目を迎えたが、大阪大学の世界適塾入試、お茶の水女子大の新フンボルト入試も昨年からは始まった。今年からは一橋大の推薦入試も全学部に拡大して実施される。本校からは、東大、京大、お茶大にそれぞれ合格者が出ている。東北大学でもAO入試で全入学者の3割を確保したいとの方針を以前より打ち出している。AO入試、推薦入試は今や「特別な入試」ではなく、入学の手段の一方法と認識しなければいけない時代なのだろう。これについては、別号で解説したいと思います。

### 一般入試受験の1stステップ - センター試験

#### ●出願日程など

5年生は先日「センター同日試験」を受験して、来年の受験に向けてスタートしたところだ。4年生にも受験してきた人がいると聞いている。その積極的な姿勢は歓迎する。そんな状況なので詳しい説明は不要と思われるが大まかなスケジュールは右表で確認しておこう。

#### ●受験科目など

センター試験は受験教科を出願時に登録する。試験当日にこれを変更することはできないので、出願時にはどの教科をどの科目で受験するのかが決めておかなければいけない。特に理科は科目選択方法が複雑であるので、受験する大学がどのように科目指定しているのかを調べておかなければいけない。理科は基礎を付した科目を①グループ、基礎を付していない科目を②グループとし、A～Dの4つの選択肢から1つを選んで出願時に登録する。基礎科目は解答時間60分で、2科目が必須である。この2科目の解答の順序、時間配分は自由である。AからDのどれで受験するかを決めるためには、出願時までに志望校をある程度決定し、理科の科目選択方法をチェックしておかなければならない。

なお、選択方法Cで受験できる大学では、同一名称を含む科目の組み合わせ(「物理基礎」と「物理」など)の可否が定められている場合があるので、気を付けよう。

各大学のセンター試験「理科」の科目指定を見ると、国公立大の文系学部はAまたはB、理系学部はDを利用するところが多い。私立大センター利用入試では、文系学部はA～Dのいずれでも受験可能などところが多く、理系学部はBが多い。

解答方法はマーク式であるが、3年後の入試からは一部を記述式にする新テスト「大学入学共通テスト」が行われることが決定している。

なお現役生は、出願から受験票の受領までの手続きを在籍校経由で行うことになっている。

### 一般入試受験の2ndステップ - 個別試験

#### ●選抜要項と募集要項は必読

国公立大は、入試など各入試の募集人員、入試日程・科目・配点などを「入学者選抜要項」に掲載して、7月末までに発表することになっている。受験に必要な情報が網羅されており、前年度からの変更点なども載せているので必ず各大学のホームページなどをチェックしよう。

### センター試験の日程

平成29年	
9月上旬～	受験案内配付
9月上旬～ 10月上旬頃	検定料など払込み
9月末頃～ 10月上旬頃	出願期間
10月末頃 までに到着	確認はがき受領
12月中旬 までに到着	受験票などの受領
平成30年	
1月13日(土) 14日(日)	本試験実施 正解などの公表
1月17日(水)頃 予定	平均点などの 中間発表
1月19日(金)予定	得点調整実施の 有無の発表
1月20日(土) 21日(日)	追(再)試験実施
2月上旬予定	平均点などの 最終発表
4月中旬以降	成績通知書の受領

### 理科の科目選択

A	理科①から2科目
B	理科②から1科目
C	理科①から2科目 + 理科②から1科目
D	理科②から2科目

### 大学入試センター試験時間割

	時間	科目
第一日	9:30~10:30	地歴・公民
	10:40~11:40	地歴・公民
	13:00~14:20	国語
	15:10~16:30	外国語
	17:10~18:10	英語リスニング
第二日	9:30~10:30	理科①
	11:20~12:20	数学①
	13:40~14:40	数学②
	15:30~16:30	理科②
	16:40~17:40	理科②

また「募集要項」は11月末から12月中旬にかけて配布される。これには募集人員、入試日程・科目・配点などはもちろん、受験の際の注意点も詳しく書かれており、出願に必要な書類も含まれている。そのため、志望大学の募集要項は必ず早めに入手しよう。募集要項は大学・学部などが指定する要項請求先に請求すれば、誰でも手に入れることができる。

●個別試験は前期日程試験と後期日程試験のダブルチャンス

国公立大一般入試は原則として、個別試験の定員を前期日程と後期日程に分けて募集する「分離分割方式」で実施される。一部公立大は、これとは別に中期日程や別日程で行うので、受験のチャンスは複数回ある。ただし、前期で合格して入学手続きを終えると、後期（中期、別日程も含む）の受験資格を失うと決められている。推薦入試の新規実施などで後期試験を廃止した大学も多く、このため後期試験の志願倍率は高くなるが、上に述べた理由から後期試験を欠席する受験生も多く、受験倍率は意外と低い場合もある。国公立大入学を目指すのであれば、後期日程受験までを視野に入れた受験計画を立てなければいけない。

●個別試験科目の傾向について

個別試験の科目の傾向をざっと見ると、英語は「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、英語表現Ⅰ・Ⅱ」が中心。「英語会話」を課す大学は少ないが、難関大の外国語学部や国際関連の学部などで課される場合もある。

国語は「国語総合のみ」または「国語総合、現代文B、古典B」を課す大学が多い。

地歴は日本史・世界史・地理の各B科目が主体である。

理科では、「基礎・発展」1科目が多く、「基礎・発展」2科目は難関大や医学科で多くみられる。

数学は、文系では数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bが多く、理系では数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bに加えて数学Ⅲを課すところが多い。

●国公立大一般入試の日程

